

Yoga 学派の主宰神存在証明

船 津 和 幸

1. Yogasūtra における主宰神

Yogasūtra (以下 YS) は周知のように主宰神の実践的意義、定義、特質に言及する。

『あるいは主宰神を瞑想することによっても (三昧が得られる)』(YS 1. 23)

『煩惱、業、果報、潜勢力により触れられることのない特殊な puruṣa である』(YS 1. 24)

『そ (の主宰神) において全知の種子は無上である』(YS 1. 25)

ここで述べられる主宰神は、実践的観点から効果の高い瞑想対象として要請されるものであって、Sāṃkhya 学派と共有する puruṣa と prakṛti の二元論を乱すほどの積極的な意義をもたないと通常解釈されている。けれども、主宰神の全知者性への言及は、二元論の枠に収まりきらない要素を既に含んでいる。Sāṃkhya 説に拠るならば、prakṛti との結合を離れ独存する puruṣa は身体も感官も有さず、従って prakṛti の第一派生物である buddhi を基盤とする知には何ら関与しない。主宰神が、定義のように、過去、現在、未来に互に独存している特殊な puruṣa である限り、全知者とはなりえないということになる¹⁾。註釈者たちは Sāṃkhya 説との文脈にこだわらずにこの主宰神に関して解釈を加えていった。本稿では Vyāsa の Yogasūtrabhāṣya (以下 YBh) において提出された主宰神存在証明の意義と、その解釈と発展の一端を、Śaṅkara 著とされる Pātañjalayogasūtravivaraṇa (以下 YBhV)¹⁾ における議論に拠って考察する。

2. 本体論的主宰神存在証明

Vyāsa は主宰神の概念規定とそれに基づく主宰神存在証明を展開する。この部分は記述的な注釈部と解し易いが、YBhV では「Sāṃkhya 派の教義では、(主宰神は) 馴染みがないので、主宰神が存在するというのであれば、主宰神の特性を知らない者は (その) 証明を必然的に尋ねるのである³⁾」、「このように主張されている主宰神を確立する証明が説かれる⁴⁾」と導入されて、以下が主宰神証明であることを明示している⁵⁾。

Vyāsa は主宰神の概念を、「そ (の主宰神) の主宰者性は同等者と優越者とを

欠いている。まず、それは他の主宰者性に凌駕されることはない。もし、優越者があるとすれば、それこそが主宰神である。故に主宰者性の極限が達成されているもの、それが主宰神である。また、そ（の主宰神）と同等な主宰者性もない⁶⁾、「過去、未来、現在に関するものであれ、個別的、集合的であれ、程度の多少はあれ、超感覚的な対象を認識するのが、全知の種子であり、それは増大しつつある。（全知の種子が）無比となっているものが全知者（即ち主宰神）である⁷⁾」と規定して、主宰神 (Īśvara) を主宰者性 (aiśvarya) と全知者性 (sarvajñatva) に関して無上無比なる唯一者とする⁸⁾。

次いで、これに立脚して二つの部分から構成される主宰神存在証明が提出される⁹⁾。

命題『全知者なる主宰神は存在する』

〔Ⅰ〕推論〔主張〕全知の種子には極限の達成がある。

〔理由〕優越者があるが故に。〔喩例〕外延の如し。

〔Ⅱ〕主宰神概念『全知の種子の極限を達成しているものが全知者であり、それが主宰神である』

YBhV は「実に優越者を有するものは極限が達成されることが経験される。ちょうど果実などの外延に虚空という極限があるように、全知の種子も極限を達成することができる」と遍充を説明する¹⁰⁾。『一切を知る者である全知者』(Mundaka Upa. 1. 1. 9) 『唯一なる主宰者』(Katha Upa. 5. 12) などの聖典や民衆の最高神の概念を根拠にして¹¹⁾、この推論を適用すれば、導かれる命題『全知者としての主宰神が存在する』は充分論証力をもつ。

ところで、西洋神学における神の存在証明に、本体論的（あるいは存在論的）として知られるものがある。それは Anselmus Cantaberiensis (1033-1109) によって提唱されたもので、「われわれは、より小さい善から出発してより大きい善へと上昇することにより、それより大きいものが考えられないかのものを十分に推論することができる」という善の段階説を前提にして、「人は『神』という語において〈それより大きいものを考えることのできないもの〉を理解する。ところで、万有の中に実在するかかる存在者はたんに考えられたものより大きいものである。それ故『神』は呼ばれるそのものは現実に存在するのでみければならない。もし現実に存在しないとすれば、それは〈それより大きいものを考えることのできないもの〉ではないことになる。なぜなら、その場合、現実に存在し、しかもより大きくあるような存在者を人は考えることになるからである」と論証

するものであり¹²⁾、明らかに、論旨、構成とも今みた Vyāsa の証明と全く同一のものである。

インド思想では本体論的主宰神存在証明はほとんど発達しなかったというのが通説であるが、ここにおそらく Vyāsa の創造になる典型的、且つ論理的整合性のあるそれが既に提唱されていることを確認できるのである¹³⁾。その画期的意義がこれまで指摘されることもなく、また中世の信仰の時代には主宰神論が諸学派で展開されたにもかかわらず、この本体論的証明が論題にされることがなかったことは不思議なことと言わねばならない¹⁴⁾。

3. YBhV における本体論的主宰神証明を巡る議論¹⁵⁾

YBhV において検討される本体論的証明への煩瑣な反論のなかで、前段の推論自体に対しては、以下の喩例「外延などの如し」に関するものが唯一であり、主張や理由や遍充に関するものはない。これはこの推論が論理的に無難なものだからであろうか。

〔反論〕「外延など」といえども、無限を極限にするものであるとは認められない。

〔答論〕自らの定説との矛盾 (siddhāntavirodha) となろう。なぜなら、ātman や虚空などに遍在性がないとすれば、(それらは) 中間的な (有限な) 外延のものであり、無常であるという論理的欠陥に帰着するからである。

〔反論〕ātman の結果 (= 個我) が至るところに見られることに基づいて、ātman は遍在すると言われるのである。

〔答論〕そうであっても共通性準拠推理 (sāmānyatodṛṣṭa) なる推論によって「鳥などの ātman が人間という領域の空間 (= 身体) などにも存在する」ことになるだろう¹⁶⁾。

反論の大部分は、『主宰神は全知者である』という命題に敷衍される後段の主宰神概念に向けられる。そしてこの「極限の主宰者、全知者は論理的に可能」とする推論を前提として、『「主宰神」の語の表示対象は「全知者」ではない』という反対主張は、単語論の観点からその論理的欠陥が指摘され、斥けられる。

「主宰者性と全知者性の種子の両者には、増大するが故に、外延の如くに、極限に達することがあると承認されるべきである。そうならば、極限を達成した主宰者性と全知者性の両者を表示する「主宰神」と「全知者」の語が当然必要である¹⁷⁾」。

「極限に達した主宰者性という語の表示対象を捨てたうえで、「主宰神」とい

う) 語の表示対象を語するという(誤謬に陥る)ことになる。語というものが、意味内容の一部を捨てて語られることはない¹⁸⁾」

「虚空は無限の外延をもつものではない」と主張し、常識となっている「虚空が無限の外延をもつ」ことを否定して、無限の外延をもつとは一般に認められていない瓶などにそれを確立しようとするのは正しくない。……主宰神であることと全知者であることが「主宰神」と「全知者」の語の表示対象であることが承認されているが故に。実に、「火は「火」の語の表示対象ではない」という主張はありえない¹⁹⁾。」

更に、概念命題における「主宰神」と「全知者」の語義に、それぞれの無限者を示す第一義と有限者を示す第二義の両義があるという意味論的解釈を導入する。

「反論主張は自らの陳述との矛盾に他ならない。優越者を有するものからそれ以上の優越者が無いものに至る様々な(程度の)主宰者性と全知者性の顕現者と共通性をもつ二者が(それぞれ)「主宰神」と「全知者」の語の表示対象であるものとして承認するが故に。実に世間では「主宰神」と「全知者」の語が(程度において)優越と劣等とに結びついた様々な(段階の)顕現を対象とする知識を生み出すものであるとされる。例(1)「村長は支配者(主宰者 īśvara)である」というとき、二村、あるいは三村を統轄する村長頭らはそれに比例して、より支配者でないはずはない。例(2)「家族の長が主人(主宰者 īśvara)である」というとき、「主宰神」(īśvara)の語が、すべて(の家長)としての表示対象をもっていない(はずはない)。例(3)「文法学者は全知者である」というとき、(普通の人より)ずっと優れた知識をもった者でないはずはない。「主宰神」と「全知者」の語の表示対象が(それぞれ)無限的な、あるいは、有限的な主宰神と全知者であると認められるべきである。この故に、それを否定すれば、主張は承認的事実との矛盾となろう。ちょうど、ātman や虚空などの(無限的な)大きさが「大きい」の語の表示対象であることを否定するのと同様である²⁰⁾」

「優越者を有する主宰者性と全知者性は、優劣ある(中間的のもの)を対象にするものであることにより(本来の意味からの)逸脱があるが故に、「主宰神」と「全知者」の語の第一義的意味ではない。ちょうど、「大きい」などの語が(本来の意味から)逸脱した大きさである「瓶」などの意味では第二義的であるのに対し、「虚空」の意味で第一義であるように、この場合でも、それ以上の優越者のない主宰者性と全知者性が逸脱なきものであり、それこそが第一義

的な語の表示対象である²¹⁾」

「増大する主宰者(性)と全知者(性)の(様々な程度の)顕現に存する共通性を表示するものであるという(推論における)理由(liṅga)により、「主宰神」と「全知者」の語が無限的な主宰神と全知者が存在することを示すものであることは既に証明されている。「大きい」「多い」「すべての」「無限の」という分量などに関する語と同様である。これら「大きい」などの語は、優越者を有する大きさなどに存する共通性をもつ既知の表示対象を表示するものであり、無限的な「大きい」「多い」「すべての」「無限の」分量の顕現者が存在することを証明する理由(liṅga)である。優越者を有する(大きさなど)の顕現者に存する「大きい」などの共通性は、無限的な「大きい」などの顕現者を遍充する能力があるが故に。実に、実在する被遍充者を実在するその遍充者が遍充しないわけではない。けれども、無限的な(被遍充者)より上位であるような被遍充者は存在しないのであるから、遍充者としての共通性には限界がある。そ(の遍充者)に関しては、被遍充者を対象とするものとして知られているのであるから²²⁾」

このように YBhV においては、意味論的検証を取り込むことで、Vyāsa の本体論的証明を構成する推論と概念規定の両者を、「主宰神は全知者である」という命題のうちに、同時に論理的に説明しようとする意図が読み取れる。YBhV で議論されるすべての主宰神存在証明の総合的考察は別稿に譲る。

-
- 1) YBhV (後出) (p. 61, 23-25, pp. 67, 26-69, 6) でも、「主宰神は全知者でも主宰者でもありえない。身体を有しないが故に。解脱した ātman の如し」という反論が採り上げられるが、答論は依然この難点を克服していない。
 - 2) Pātañjalayogasūtrabhāṣyavivaraṇam, Madras Government Oriental Series No. 94, 1952. YBh と YBhV の引用はこれに拠る。
 - 3) YBhV p. 53, 14-15
 - 4) YBhV p. 57, 16.
 - 5) Vācaspatimiśra の Tattvavaiśāradi でも、論証式における主張、理由、喩例の各部を指摘したうえ、この論証における遍充関係(vyāpti)を「いかなるものであれ、優越者があるものはすべて、(あるものにおいて)もうそれ以上優れているものがないものとなる。ちょうど kuvala や āmalaka や bilva の果実の間で(程度において)優越者を有する大きさが、ātman において無上になるのと同様である」という形で総括している。
(Pātañjalayogasūtrāṇi, Bombay Sanskrit and Prakrit Series No. 46, pp. 30, 20-31, 11).
 - 6) YBh p. 56, 3-5.
 - 7) YBh p. 57, 9-10.
 - 8) YBhVでは、主宰神の概念として全知(sarvajña)のみならず、全能(sarvaśakti)

と主宰 (aiśvarya) の三特性を想定していると思われ、後者二つに対しても証明を適用することは注目すべきことである。「同様に、能力もまた優越者があるが故に、増大するものであり、(それが) 極限を達成しているところの者、それが全能者 (としての主宰神) である。従って世界の創造、維持、破壊などの行為者である (主宰神が存在する) ことが証明される。同様に、主宰者性も増大するものであり、それが極限を達成しているところの者、それが大主宰神 (paramēśvara) である」(YBhV p. 57.25-27) これは Pāśupata 派からの影響か? 村上真完「世界創造神の証明とその批判」(『神観念の比較文化論的研究』講談社, 昭56, p.547) 参照。

- 9) YBh p. 57.10-12.
- 10) YBhV p. 58.16-17.
- 11) cf. YBhV p. 62.18-25.
- 12) 泉治典『アウグスティヌスからアンセルムスへ』創文社, 昭55, pp.201-224.
- 13) 中村元氏は、Deussen は「インド人は存在論的証明のとりこになることはなかったようである」というが、「あらゆる概念の最高の類は有であり、その存在を否定することはできない。それは絶対者である」というバルトリハリの論にそれを見出すことができると指摘する。(『中世思想 (下)』春秋社, 昭51, pp.476-477) また、Deussen の言を見事に覆す実例として「主宰神の全知性を否認するのは根拠の無いことであるから主宰神の存在を承認しなければならぬ。何となれば、語としての意義をもたぬものを否定することは不可能であるから。すなわち単に na (…でない) という否定詞だけを用いることは有り得ない。「主宰神は全知者でない」というふうにいわれるのであるから、それについては、他の或る場合に (誰か他の人によって) (主宰神が) 全知者であるということがすでに承認されているのである」という YBhV (p.64.9-11) の議論を挙げる (「ヨーガ・スートラ」解明) (22) 『月刊アーガマ』通巻第31号, 昭57, pp.32-33, 37) が、本稿で扱った Vyāsa の証明、あるいは YBhV の議論のほうが適切であろう。
- 14) Nyāya-Vaiśeṣika 派の主宰神論については、宮元啓一「Uddiyotakara の Īśvara 論 (I)」(『印仏研』22-1, 昭48), 石飛道子「ニヤヤ派の主宰神論」(『宗教研究』269, 1986), 狩野恭「主宰神の存在証明と kevalavyatirekīhetu」(『インド思想史研究』5, 1987)) など参照。
- 15) YBhV 中の他のタイプの主宰神証明については、拙稿「サーンキヤ学派とヨーガ学派のアートマン論」(『岩波講座・東洋思想 6』岩波書店, 昭63) 参照。
- 16) YBhV p. 63.14-17.
- 17) YBhV p. 63.8-10.
- 18) YBhV p. 63.12-13.
- 19) YBhV p. 64.19-24.
- 20) YBhV p. 65.3-12.
- 21) YBhV p. 67.8-11.
- 22) YBhV p. 66.10-18.

<キーワード> 主宰神存在証明, 本体論的証明, Yogasūtrabhāṣyavivaraṇa

(信州大学講師)